
論文執筆の手引き

(2007年度版)

製作・発行：立教大学社会学部社会学科

服部孝章ゼミ

はじめに

この小冊子は、学生諸君が卒業論文を執筆する際に必要とされる数々の形式上の約束事についてまとめたものである。ここに記述されている事柄の中には学術論文特有の約束事もあれば（卒業論文も学術論文の一種である）、より一般的な文章表記上のきまりも含まれている。

もちろん、書き残したり書き足りない事柄も多々ある。また本冊子の内容が論文作法上の唯一絶対的な規則だなどと主張する気は毛頭ない。本冊子は、これまでの経験から会得した事柄を列記したものにすぎない。あくまでもひとつの参考、あるいはひとつのヒナ型として受け取ってほしい。

論文書式の作法以外の、論文の書き方のハウツーや具体的な手順は、一番最後にあげる先人達の手本を一読・参考にされることを薦める。良い文章を書くためには、良書や名文に当たることが望ましい。それにめぐり会うためにも、とにかく多読する必要があるだろう。

ともあれ、ノートにメモを書き溜めたり、論文の構想をめぐらしたり、原稿用紙あるいはパソコンに向かって書き始める前に、まずはこの冊子を一読してほしい。

さらに、社会の現状にその行く末を展望しつつ、凝視する力量を育むこと。あわせて、どんな状況におかれていても、私たちの前を、時間は規則正しく通り過ぎていくことを傍観しないこと。

2006年4月

服部孝章

・本冊子は、1985年3月に作成された「東海大学文学部広報メディア課程 卒論執筆の手引き」(服部孝章、竹下俊郎 共同執筆)に加筆・修正したものである。

・本冊子の作成に当たっては、2001年度に、大学院(当時)の浅岡隆裕君並びにコミュニティ福祉学部(当時)の平野貴大君の協力を得た。記して感謝したい。両君はそれぞれ現在、社会学部助手、コミュニティ福祉研究科のM2 大学院生である。

・ 目次

はじめに	2
1. 学術論文の性格と構成	4
(1) 学術論文の性格	4
(2) 学術論文の構成	5
2. 文章表記上の一般的注意	7
(1) 符号	7
(2) 英数字	7
(3) 語の略記	7
(4) 刊行物名、論文名など	7
(5) 改行	8
3. 注、引用、文献表の書き方	9
(1) 注の役割—補足的説明	9
(2) 注の役割—引用の出所の表示	9
(3) 文献の表記—注に含める場合	1 1
(4) 文献の表記—文献表を伴う場合	1 2
4. 図表の書き方	1 3
(1) 一般的注意	1 3
(2) 他の文献・資料からの引用	1 3
(3) 自作の図、表の場合	1 3
(4) 調査概要について	1 6
5. 卒論レベルアップのレファレンスガイド	1 7
参考文献	1 9

1. 学術論文の性格と構成

(1) 学術論文の性格

そもそも卒業論文、あるいはもっと広く、いわゆる学術論文とは、いったいいかなる性格を持った文章形式なのか。この点に関しては、澤田昭夫氏の簡潔かつ優れた説明があるので、それを引用することにしよう。

つまり論文とは大論文であれ小論文であれ、一定の明確な問を提示してそれに答えるもの、「何か」、「なぜか」、「AはBか」、「CはいかにしてBとなったか」、「Zを生み出すためにどうすべきか」などという分析的問に答える説明的ないし論証的書き物で、一中略一叙情的な描写や感想文は論文ではないし、さまざまな命題や記述をただ並べても論文にはなりません。(澤田 1983. p.18)

すなわち学術論文とは(澤田氏の言うところの‘論文’が主として学術論文であることは彼の著書を読めば明らかである)、自らで提起した学問的問いに対し、自らで答えるという、一種の自問自答の形式を持った文章のことなのである。

自らの問題設定&解決という意味で、論文とは言えないのは次のようなものである。

1. 一冊の書物や、一篇の論文を要約したものは研究論文ではない
2. 他人の説を無批判に繰り返したものは研究論文ではない
3. 引用を並べただけでは研究論文ではない
4. 証拠立てられない私見だけでは論文にならない
5. 他人の業績を無断で使ったものは剽窃であって研究論文ではない
(斉藤 1992.pp.7-13)

上で挙げた‘学問的問い’とは、いわゆる論文のテーマのことにほかならない。学生諸君に卒業論文のテーマをたずねると、たとえば「テレビの影響」とか「日本におけるCATV」とかいった返答が戻ってくることがある。しかし、それらはあくまでもテーマ‘領域’であり、論文をまとめるためには、そうしたテーマ領域で各人が重要と考えるより具体的な問題点を、問いの形で提示する必要がある。たとえば上記の例で言えば、「テレビは青少年の政治意識にどのような影響を及ぼしているか」、あるいは、「日本のCATVの発達過程は、アメリカにおけるそれとどのような点が異なっているか」といった具合にである。

問い、すなわちテーマの立てかたは各人自由でよいが、しかし一般的に言って、論文を書く場合には包括的・抽象的なテーマよりも、ある程度限定的・具体的なテーマのほうが、まとまりのとれた良いものが書けるようである。

比較的短い論文を書くときには、特にそれが言える。たとえば上記の最初の例の場合には、問いをもっと絞り、「テレビ・ニュースは、青少年の、政治指導者に対する意識や評価にいかなる影響を及ぼしているか」という形に書き換えることも可能であるし、原稿用紙 30～50 枚程度の論文の場合には、そのほうが適切であろう。

もちろん、テーマはただ具体的でさえあればよいというのではなく、そうした問いかけを行うだけの意義のあるものでなければならない。限定的かつ有意義なテーマを設定するためには、自らの選択したテーマ領域に対する関心の程度とともに、その領域についてどれだけの知識や情報を事前にもっているかということが決め手となる。われわれが学生諸君に対し、関心領域に関する丹念な文献研究や予備調査を要請するのは、こうした理由からなのである。

(2) 学術論文の構成

つぎに、学術論文が原則としてどのような構成をとるのかということについて、これも澤田（1983）に依拠しながら述べていこう。

まず留意すべきことは、学術論文の構成の大原則は‘序’と‘本論’と‘結び’だということである。小説、戯曲やマンガとは違うのであるから、間違っても‘起承転結’などとしてはいけない。既述したように、学術論文とは自問自答形式の文章であり、したがって、問いを紹介する部分（序）、答えを支える議論を展開する部分（本論）、議論をまとめ、問いに対する答えを提示する部分（結論）という構成をとるのが正統なのである。なお分量比に関しては、序・本論・結論をおよそ 5:80:15 の割合に区分すべしという説がある。だが、これはくまでも、ひとつの目安として考えておけばよいであろう。

三つのパートのうち、本論の構成や展開については、それは問いの立てかたや論文の種類によって大幅に異なるものであるから、ここで概括的なことを述べることはできない。しかし、序と結論に関しては、それぞれおよそ次のような事項のあることが望ましいとされている（澤田 1983. pp.75-77）。

■ 序

◎ 問いの紹介

● 問題の研究史（大きい論文の場合）、あるいは問いが出てきたきっかけ（小論文の場合）

● 議論の手順の紹介（本論各章が問題のどういう側面をそれぞれ扱っているのか、各章の目的を示す）

■ 結論

◎ 本論の要点の要約＝序で示した問いへの答え

- より大きな問題との関連付け
- 今後の研究方向や研究課題の示唆
(それぞれ○印も事項が最も重要である)

以上のような点をふまえたうえで、学術論文の構成の雛型を示すなら、次のようになろう。

- 論文タイトル
- 目次
- 序（論）
- 本論（第1章、第2章・・・）
- 結論
- 注、文献

※なお、本論各章の内部は、さらに第1節、第2節、・・・と分かれることが多い。ただし、これは論文の長さにもよる。原稿用紙10枚程度の論文で、中が章、説などとコマ切れになっていれば、かえって読みづらいものである。その場合には、せいぜい章どまりが望ましい。また、実際の表記においては、必ずしも第○章、第○説などと書かなくてもよい。たとえば、章を表記するときはただの数字で（1., 2., ...）、説を示す場合にはカッコつきの数字で（(1), (2), ...）、といった書き方を採用してもよいのである。要は、ひとつの論文の中で、表記法に一貫性があることである。

2. 文章表記上の一般的注意

ここでは、ワープロ（ソフト）を利用する際に留意すべき諸点についてふれてみたい。

(1) 符号

句読点（、）やカッコの閉じる側（）》）や繰り返し記号（々々）は、行の冒頭に持ってきてはいけない。文字数を調節して、前行で完結させるようにする。もしくはワープロソフトでは、文字数的に符号が冒頭にきてしまう場合、「禁則処理」などの機能を使えば、自動的に最終文字の隣に符号が配される。卒論のみならず、小論文など文章を書く際の鉄則でもあり、最初から禁則処理機能は設定すべきであろう。

時期に至っているのだといえよう。
だが、ここでは・・・

……世界各地で一斉に開花した。」

(2) 英数字

アルファベットの語や人名が長い場合、および2桁以上のアラビア数字の場合には半角文字で書くようにする。

*CATV*は *Cable Television* の略称であり……

さて、1970年代から顕著になった研究動向としては、第1に……

(3) 語の略記

略語は以下の要領で行う。

「情報自由法」(*Freedom of Information Act*、以下*FOIA*という)が制定され……。 *FOIA*は……

1968年に実施された調査(以下、68年調査と略記)は多くの研究者…

(4) 刊行物名、論文名など

単行本の書名や雑誌・専門誌などの定期刊行物は『』で、また、個別の論文名や記事名は「」で、それぞれくくる(ただし、日本語表記の場合)。

例) ……*W・リップマン*が著した『世論』は……

・・・『週刊文春』誌上に掲載された「疑惑の銃弾」は・・・

なお、新聞名の場合には——これも定期刊行物名であるが——文中で言及するときには、「」でくくることがよくある。

例) ・・・「読売新聞」と「朝日新聞」の販売競争は・・・

(5) 改行

最初の書き出しや段落の始めは、行の冒頭の1文字分あける。

(6) 文献引用 (次の3. 注、引用、文献表の書き方で詳細に解説)

出典を明らかにする。参考にする文献等の知見をあたかも自分の物とすることは**盗用**であり、学術目的のものに限らず、**ルール違反**である。

3. 注、引用、文献表の書き方

(1) 注の役割—補足的説明

注の役割は、①本文の記述に補足的な説明を付け加えること、②引用の出所の表示することである。

注の記載方法としては、主として a. 本文該当ページの下につける場合(脚注)、b. 各章末もしくは各節末につける場合、c. 結論の後にまとめてつける場合、などがあるが、原稿用紙50枚程度やそれ以下の枚数の論文では、cの方法を勧めたい。注には1) 2) 3)・・・、あるいは(1), (2), (3), ...と通し番号をつけるが、項目数が多い場合には、序、各章、結論ごとに分けて通し番号をつけておくと見やすいだろう。

まず、注の前者の役割について見てみよう。

- 本文における注の指示(該当する文や語句の右肩行間に)
受け手の態度ではなく認知³⁾に対する・・・

- 注の表記
³⁾ なお、本稿では「認知」と「態度」を分析上区別し・・・

(2) 注の役割—引用の出所の表示

注はまた、自分の解釈や主張のもとになる、あるいは議論を展開する過程で引用した文献・資料などを明示するためにも用いられる。

なぜそれが必要なのか。沢田(1983)によれば、それは第一に、自分の主張や解釈がデタラメのものではなく、確かなデータや証拠に基づいていることを示すため、第二に、自分の主張や解釈のもとになった先人の業績を明記することで、その仕事を利用させてもらった他者への感謝の意を表明するため、ということになる(pp.247-248)。ついでながら、沢田氏の次の言葉は、ぜひ銘記しておくべきである。

「他人の論文の全部または一部をそのまま無断で引用したことが発覚すると、それは盗作ということになり、当人の引責・辞任問題〔諸君の場合は落第〕にまで発展しかねないので、普通の人には盗作を遠慮します。ところが、そのままの引用ではないが、乙、丙両氏の研究を明らかに利用し、それなしには甲氏の研究は生まれなかったはずなのに、乙、丙の論文名を挙げるだけの労さえ惜しみ、しゃあしゃあとしてしている、仁義を知らぬ研究者はわが国ではまだ少ないのです。—中略— 専門家の目はごまかせません。それ〔無断利用〕がわかれば甲氏の独創性ではなく欺瞞性の保証になってしまいます。」

さて、この場合の注の付けかたを実例で示そう。

[本文]

見田宗介によれば、日本の流行歌の中では、「汽笛」は郷愁や哀愁のシンボルとして用いられることが多い。⁵⁾

[注]

⁵⁾ 見田宗介『近代日本の心情の歴史——流行歌の社会心理史』講談社学術文庫、1978年

他の文に引用語句を入れるときは、引用部分だけ「」でくくる。

[本文]

「この国で情報公開制度が生まれた直接のきっかけは一つの“誤解”だった」ことが朝日新聞で紹介されている。²⁾

[注]

²⁾「朝日新聞」1980年11月1日付け

[本文]

箕輪の批評は辛辣である。「何とも判読できない。書きなぐりの原稿を平気で提出する教授」や「自分のおくれのために、共著者の原稿が棚ざらしされ、古くなってしまっても一向に平気な教授」がいるという¹³⁾。これはいささか誇張し

[注]

¹³⁾ 箕輪成男『消費としての出版』弓立社、1983年.235-236項

また、特定の文章全体を引用するときは、前後の一行をあけ、各行とも1字（もしくは2字）下げて書く。引用文章はやはり「」でくくっておくとよい。

稲葉は次のようにまとめている。

「マス・コミュニケーションで受け手は直接の反応を送り返せないのだから、だから責任を負おうとしないのだ。というのがボードリヤールの持論である。大量生産……→大量消費の連鎖の中の消費者についても、同様の指摘がほぼ妥当する。」

この記述からも明らかな……

■文章の一部を省略して引用する場合には、……や—中略—といった表記法を用いる（上記の諸例を参照。なお点々は2文字分程度でよい。ダッシュ——の場合もまた同様）。

■引用者が引用文に補記する場合には、補記部分を〔 〕でくくる。そして引用部分の最後に‘〔 〕内は引用者による’などと付記しておけばよい。
(上記の沢田氏の文章の引用参照)。

■引用する場合は、できる限り原資料にあたるのが好ましいが、やむえない時(たとえば、原資料の検討が物理的・時間的に困難なときなど)には重引(孫引き)も許される。ただし、その場合は重引した旨を必ず明記すること。

21) P. ラザースフェルドらの言葉。ただし、佐藤智雄『マス・コミュニケーション論 I』旺文社、1983年、132項より重引。

細かいことだが、原則として、引用は原文を忠実に写すこと。上記の沢田氏の引用文章、で、‘ママ’と添え字をしている部分がある。この箇所は原文をそのまま写したものであるが、おそらく本文は「しゃあしゃあとしている」となるべきところが、ミスプリントか何かで「して」が重なった、と引用者は判断したわけである。このように仮に疑問や問題を感じた箇所があった場合には、それを引用者が勝手に修正するのではなく、いちおう原文をそのまま記したうえで、上記のような記号をつけておくのがよい。

(3) 文献の表記——注に含める場合

論文作成に利用した文献名を表記する方法としては、それらを注の中に含めるやり方と論文の最後に文献表をつける方法とがある。前者の場合には、次のような体裁になる。

- 1) 服部孝章「国際コミュニケーションと放送文化」津金沢聡広・田宮武編著『放送文化論』ミネルヴァ書房、1983年、187頁。
- 2) 今井賢一『情報ネットワーク社会』岩波新書、1984年、第一章の議論を参照のこと
- 3) 同上、21-25頁
- 4) バロン、J. A. (清水英夫・堀部政男ほか訳)『アクセス権——誰のための自由か』日本評論社、1978年。
- 5) 服部、前掲論文、190頁。
- 6) 堀川敏雄「第三世界と通信社」『新聞研究』1979年2月号、46-50頁

文献表記の書式には特に決まった形があるわけではないが、少なくとも次のような項目は必要であろう。

筆(著)者名/論文名(著書名)/〔論文の場合〕掲載誌(書)名 /出版社(発行所)名/発表年/引用頁/etc。

新聞・雑誌や専門紙誌などに掲載された記事・論文を引用した場合には、それらの巻号数も忘れずに記入する（新聞などでは日付）。ただしこの種の定期刊行物の場合には、出版社（発行所）名は省略されることがよくある。

引用頁は、引用箇所が原文の1頁の内に収まっているときは‘15頁’（あるいはp.15）といった具合に書く。引用箇所が原文の複数頁に渡るときには、‘15-17頁’（あるいはpp.15-17.）などというふうに記入する。

外国語文献の場合も日本語文献の表記に準ずる。原則として、外国語の論文名は引用符“ ”でくくり、また単行本名や定期刊行物名は（手書きやタイプライタを利用する場合には）アンダーラインを引いていくとよい（アンダーライン部分は活字のなった場合にはイタリック体で表記される）。

例 *McQuail. D., Mass Communication Theory. Sage. 1983*
Breed. W., "Analyzing News : Some questions for research"
Journalism Quarterly 33 . pp.467-477

（このように外国の著者名も、姓・名の順序で書くことが多い）。

注において同一の著書や論文が何度も登場する場合には、2回目からは「前掲書（論文）」（あるいは、o p . c i t）と書く。同一文献が、たとえば1）、2）と続けて引用される場合には、2）では「同上」（あるいは、i b i d.）と記入する。いずれも上記の例を参照されたい。

なお、インターネット上でのテキストを引用する場合は、URL やドメイン名などを明記して、そのサイトが確認ができるようにしておく。

（4）文献の表記——文献表を伴う場合

文献の表記には、以上に述べたものとは別の方法がある。すなわち、引用の出所を示すための注は極力排除し、その代わり、出所の表示が必要な場合には、本文中に「著者名（姓のみ）+発表年 [+（場合によっては）引用頁]」を書き込むことで表示する方法である。

例) . . . 服部 (1981) によれば、この法律は . . .
 . . . という指摘もある (竹下. 1984)。
 . . . された」という (服部. 1985. p p. 4-5.)。 . . .

そしてこの場合には、後の文献表を見れば、各文献に関する完全な情報がわかるという仕組みになっているのである。すでにおわかりと思うが、本冊子もこの表記法を採用している。この方法では、普通、文献表は巻末の、注（このような方法を採用した場合でも、補足的説明のための注は、やはり必要である）の後につくことが多い。

表では、各文献は著者の性のアルファベット順（日本語文献のみの場合には五十音順でもよからう）に配列する。

4. 図表の書き方

(1) 一般的注意

図や表は本文とは別紙に書き、その図、表に関して言及されている本文の頁のすぐ後ろにはさみこむ。図、表には、それぞれ通し番号をつけ（たとえば、図 1、図 2、・・・；表 1、表 2、・・・）、さらに標題をつける。なお、通し番号は、図や表の量が多い時には、各章ごとにふるとよい。

例) 表 V-3・・・第 5 章の第 3 表。

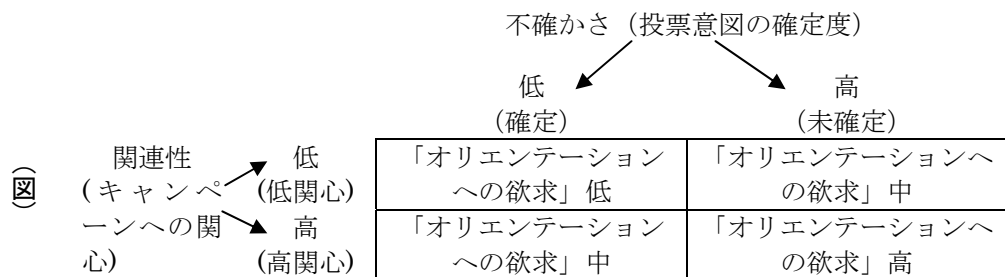
(2) 他の文献・資料からの引用

引用した図、表の下に必ず出所を明記すること。

例) 報を求めようとする動機付けの強さを表すもので、“関連性 (relevance)” と “不確かさ (uncertainty)” という 2 つの下位概念から構成されている。ウィーバーらの 1976 年調査では図 3 のように操作化され、各面接時点ごとに、欲求の高低に応じてサンプルが 3 分類された。

(本文と図の番号は対応するように)

図 3 「オリエンテーションへの欲求」の操作化



出所: Weaver et al. (1981) P.96 より作成
(出所の表示)

上記の例の「・・・P.96より作成」は、引用に際して引用者が補記したことを示している。元の図や表をそのまま写す場合には下線部の言葉は不要である。

(3) 自作の図、表の場合

自分で調査や実験などを実施し、そのデータをもとに図や表を作成する場合には、事前に指導教官にアドバイスを受けるか、あるいは信頼のおける論文や調査報告書を参考にすることが望ましい。紙数の関係で、以下に述べる注意は極めて不十分なものでしかない。

単純集計表の場合

・結果（カテゴリー分布）を%で記述する場合には、全体のケース数（通常N＝で表示）で記すのを忘れないこと。

例) 表1 市や都の広報誌の閲読頻度

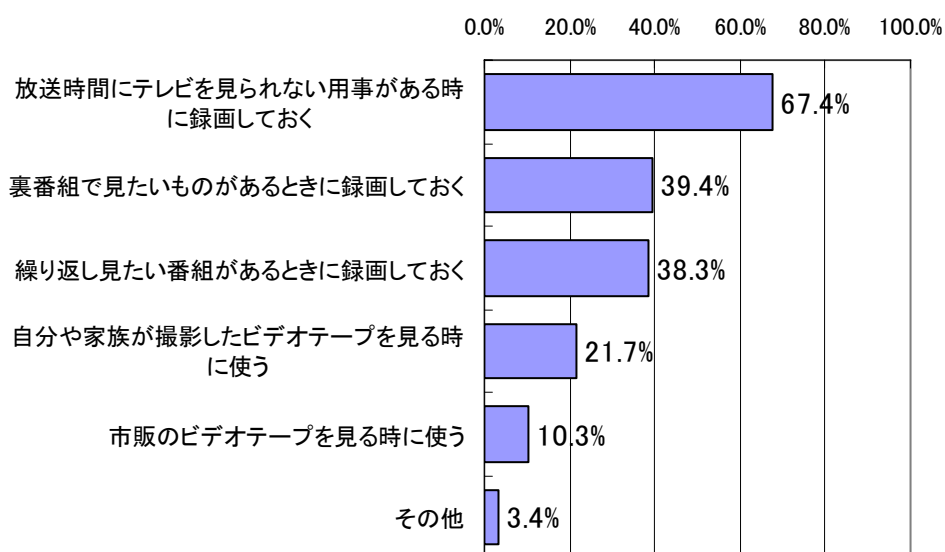
ほぼ毎号読む	48.0 (%)
ときどき読む	32.4
めったに読まない	19.2
DK. NA	0.4
計	100.0
(N=552)	

・また、複数回答方式で質問した項目の場合には、標題のところに〔複数回答（あるいはMA）〕と書き添えること。

・単純集計表はまた、円グラフや帯グラフ、棒グラフなどの形に書き換えることもできる。どういう表現形式をとるかは、筆者の判断による。

例)

図5 ホームビデオの利用法〔複数回答〕



(N=316、VTR保有者のみ)

クロス集計表の場合

・2種類の項目への回答を組み合わせて表示したのがクロス集計表である（厳密には‘2種類以上’とすべきだが、ここでは典型的な場合に話を限定する）。クロス表の2つの項目は、形式的には独立（説明）変数とに分けられるが、表の%には独立変数の各カテゴリーごとに、それぞれ合計が100%となるように算定する。

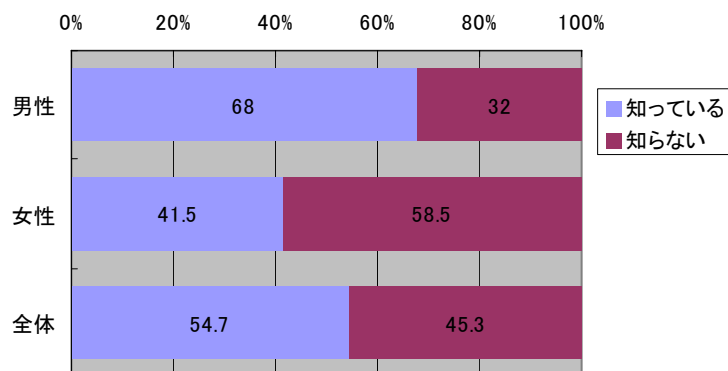
例) 表7 性別×「ICNまちだテレビ局」の周知率

	知っている	知らない	計 (N)	独立変数 (したがって、各行ごとに計100%になる)
男性	68.0	32.0	100.0(275)	
女性	41.5	58.5	100.0(277)	
全体	54.7	45.3	100.0(552)	

従属変数

・クロス集計表はまた、帯グラフと独立変数のカテゴリー数 (+1) だけ重ねることで図示することもできる。

例) 表7 性別×「ICNまちだテレビ局」の周知率



※ ‘独立変数のカテゴリー数 (+1)’ の (+1) とは、最下行の全体集計結果のことである。

(4) 調査概要について

自分で調査を実施した場合には、その調査のタイトル／調査の目的／調査事項／調査時期／調査対象（標本の抽出方法）／調査方法／有効標本数（回収率）などの情報をまとめた調査概要を提示しておくことが望ましい。下記の例はNHKの研究所が実施したある調査の概要である（NHK放送世論調査所編『家族とテレビ』1981年）

例)

調査の概要

調査主題	家族とテレビⅠ	家族テレビⅡ
調査の目的	夜のテレビを、都会の家族のメンバーがお互いに影響しあいながら、どのように見ているかを明らかにする	夜のテレビを、農村の家族のメンバーがお互いに影響しあいながら、どのように見ているかを明らかにする。
調査事項	家族メンバー各々の、夜のテレビ番組の視聴の有無 家族メンバー各々の、夜のテレビ番組の視聴の積極性のいかん 家族・家庭の状況	
調査時期	昭和54年1月22日（月）～28日（日）	昭和55年10月20日（月）～26日（日）
調査対象	東京30km圏内の夫婦そろっている2000世帯（20世帯×100地点）	群馬県の農村地域（1次産業人口率30%以上）の夫婦のそろっている2000世帯（20世帯×100地点）
調査方法	配布回収法	
有効数（率）	1497世帯（74.9%）	1654世帯（82.7%）

5. 卒論レベルアップのためのレファレンスガイド

卒論や小論文の作成のための参考書籍は書店に行くと、様々なものが並んでいる。是非実際に手にとって読んでもらいたい。

文章の書き方についても、「文章講座」の類書がたくさん刊行されており、自分のレベルや好みに合わせて選んでほしい。

また論文作成マニュアルでは、総花的な内容になりやすく、「発想」「思考」「情報収集」「調査」といった個別のテーマについては、以下に挙げるような専門書もある。「自分に何が欠けているのか」あるいは「自分でどのようなスキルアップをしたいのか」という点を考慮した上で熟読することを薦める。なお、日本語の作文技術を高めるために、ぜひとも下記の文庫本を読んでおこう。

本多勝一『日本語の作文技術』(朝日文庫ほか)

①卒論執筆のためのガイダンス

早稲田大学出版部編(1997)『卒論・ゼミ論の書き方』早稲田大学出版部

大学生の目線に合わせて、論文作成の前提、資料集め・整理、書き方などが平易に説明されている。

本書での卒論のタイムスケジュールの作り方、「論文の作成のプロセス」として、メモ書き→下書き→仮草稿→清書といった手順をとることは、テクニクとして是非修得していききたいものである。

櫻井雅夫(1998)『レポート・論文の書き方 上級』慶応義塾大学出版部

より上級レベルの書き手のためのレファレンス。論文執筆の基礎から、論文の体裁まで網羅しているが、卒論以外にも修士論文にも充分に対応できる内容となっている。論文の形式的な部分(体裁、タームの表記、注記、参考文献)についての詳細な説明は、上級レベルの仕上げを目指す場合には目を通しておきたい。

②技法の個別のノウハウについて

嚮田隆史(2001)『「考える力」をつける本』三笠書房知的生き方文庫

「新聞・本の読み方」から「発想の技術」まで、知的思考の鍛え方を著者の経験から列挙したもの。ノウハウ集になっており、自分の関心があるテーマだけ読めばそれで事足りる内容になっている。

特に論文作成に際してのヒントとして、「考えをふくらませ、まとめるのに最適な『箇条書きメモ』」などのメモ活用や「観察は常に小さなもの、身近なものを出発点」といった視点の持ち方は参考になる。

板坂元(1973)『考える技術・書く技術』講談社現代新書

筆者の主張「すぐれた論文・レポートは文章技術の修練だけでは生まれな

い。目のつけどころや発想法、材料の集め方や整理術、さらに構成力や説得術が必須の条件となる」のノウハウを公開している。

本書では、文章の構成の仕方や、「説得力」を持たせるための技術的アドバイスが充実しており、卒論のみならず、一般の文章執筆にも応用できることが多い。

③内容面でのクオリティアップ

猪瀬直樹(2001)『小論文の書き方』文春新書

いかに真実に迫っていくのか、現役のノンフィクション作家の実践的方法論と、時事的テーマを論じた評論での二部構成になっている。

筆者は、新聞などのメディアで書かれている意見や文体は疑ってかかり、まず自分なりの独自の仮説を立てることを主張する。論文などで問われるのは、オリジナルな発想である。その仮説があつて素材収集をすべきであるし、適切な素材によってこそ説得力が生まれるという。本書で多くのページ数を割かれている時事評論は筆者の実践例として読める。

福田和也(2001)『ひと月百冊を読み、三百枚書く私の方法』PHP研究所

「たくさんの本を読み、たくさん文章を書けるのか」、新進気鋭の評論家の仕事術。

本書では、「仲間との対話の効用」を説いている。論文作成は孤独な作業であるが、周囲を巻き込むことで内容面での充実が図れる。なるべく早い段階で、自分の考えをまとめ(文章化)、知人や指導教員など多くの人に自分の考えを聞いてもらう。そうすることで、自分が何について書こうとしているのかを意識的に考えるようになる。さらには周囲からのアドバイスによって気がつくこともあるし、情報自体を得ることができる。また自分の話がうまく伝わらなければ、説得力が不足していることを実感できるのである。

④他のテクニックについて

図解表現テクニックやパソコンを使ったプレゼンテーションなど、人前での発表の具体的なノウハウについては、諏訪邦夫(1995)『発表の技法』講談社ブルーバックス新書が参考になる。

インターネットは情報検索にも有用であるが、方法や情報源については、経済学者の野口悠紀夫の一連の著作、例えば、野口悠紀夫(1999)『インターネット「超」活用法』講談社に詳しい。版が改訂されて刊行されているので、できるだけ最新の版や著作を読みたい。

自分で調査をする場合には、社会調査やマーケティングリサーチの専門書などが多数あり、複数読み比べても良い。マスコミに関係する分野に特化する形で、鈴木裕久(1990)『マスコミュニケーションの調査研究法』創風社があり、調査の全体像がわかりやすく、調査事例も豊富に掲載されており、好著である。

《参考文献》

- 今野敏彦(1982)「卒業論文の手引き」
東海大学文学部広報学科情報社会課程研究室
- 斎藤 孝(1977)『学術論文の技法』
日本エディタースクール出版部
- 澤田昭夫(1983)『論文のレトリック』
講談社学術文庫

This booklet was redesigned and reproduced by T. Hattori in July 2001.